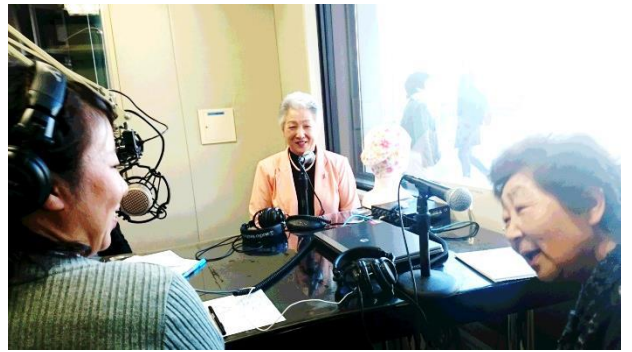


市民活動をFMラジオで発信！！ 『つなげよう！市民のチカラ！』

○第11回：2016年3月27日（日）

○ゲスト：ケア帽子の普及を進めるわた帽子の会
赤石 敏子さん、木村 好子さん



「ケア帽子の普及を進めるわた帽子の会」の
赤石さん（中央奥）と木村さん（右手前）

○放送内容

「ケア帽子の普及を進めるわた帽子の会」では、抗がん剤治療の副作用で髪が抜けてしまった人たちにかぶってもらうケア帽子作りの講習会を県内外各地で開催しています。がん患者やその家族が明るく前向きに治療できるように支援する活動についてお話しいただきました。

□ 希望の帽子

平成21年に、八戸市のがん患者交流セミナーの受付で初めてタオル帽子に出会ったという赤石さん。

「私自身ががんの体験者で、私のときはそういう帽子はありませんでした。」

その後、弘前大学にがんサロンができ、たくさんのケア帽子が岩手ホスピスの会から送られてきていることを知ります。年間、弘前大学は300枚から400枚の帽子が必要である実状がわかりました。赤石さんたちは足りない分を自分たちが何とかしないと使えないと使命感に燃え、帽子作りをスタートさせました。

□ 笑顔が生きがい

「弘前大学医学部附属病院のがんサロンでの毎月1回のタオル帽子講習会、そして不足分を補うための帽子作り。毎日毎日作りました。作っているうちに、タオル帽子は病院の中か家の中で使用し、退院して通院するときの帽子はタオルではなくニット帽子の方が格好いいのでは！と思うようになりました」と試行錯誤を繰り返したケア帽子作りの様子を話します。

「岩手県・野田村へもボランティアに行き、野田村の方が作った帽子で弘前で展示会をしました。市民の方がくださったタオルへの感謝の気持ちをお伝えし、市民の方の協力を形で表したいと思いました。笑顔でケア帽子を手にする患者さん、ご家族。私たちもその笑顔と感謝の言葉にたくさんの勇気と生きがいをいただきました」と、ケア帽子の必要性を強く感じてケア帽子作りを広める活動を継続しています。

いろんなところで話を聞くと、タオル帽子があることさえ知らない人や悩んでいる人も多いと話す赤石さん。今では、こういう帽子を作ってほしいという要望に応えながら、様々な生地やデザインの帽子を作っています。

「私自身、抗がん剤と言われたとき、すごく不安でした。こういう帽子があるとわかれば、恐怖が半分で済むんじゃないかと思うんですよ。」と、誰でも作れるケア帽子を一人でも多くの人に伝えていきたいとお話されていました。

□ 芽を出し力強く増えていくように

赤石さんは、「活動が根を張り始めたところもあります。弘前市総合学習センターにある東部公民館の『ひまわり女性教室』のみなさんが、弘前市立病院にケア帽子を寄贈しています。また、五所川原市のつがる総合病院にケア帽子を寄贈するとともに、毎月1回のケア帽子講習会もスタートし、がん患者家族会『つがる』が発足しました」と活動への参加者が増えてきていると話します。

「たんぼぼの綿毛が風に乗って、あちらこちらで芽を出し力強く増えていくように、ケア帽子作りも広がってほしい。グループとかでやってみたいという連絡ができれば、私の方から出向いて参ります。」と話す赤石さん。

「ケア帽子の普及を進めるわた帽子の会」では、これからも、どの地域にいてもケア帽子で前向きに明るく治療ができるよう、患者や家族を応援する活動を展開していきます。

☆あなたも活動に参加してみませんか？

【ケア帽子作り】
抗がん剤治療で髪が抜けてしまった人たちのために、ケア帽子を手作りしています。
自由参加ですので、みなさんぜひご参加ください！

☆弘前市民参画センター
弘前市大字元寺町 1-13 2階
毎月第2金曜日、午後1時30分～午後3時まで

☆つがる総合病院
五所川原市字岩木町 12-3
毎月第2土曜日、午後1時～午後3時まで

※タオルと裁縫道具をご持参ください。